



社会の中の まゆねえちゃん

桃山学院中学校一年

谷口 綾音

「あやちゃん、はよ、これかたづけてかえりや。」
「わかってるよ、まゆねえちゃんちょっと待ってや。」

これは、私が祖母の家に遊びに行った時に、必ず交わすやりとりです。まゆねえちゃんは私の叔母にあたる人で、明るい障がい者です。障がいの程度はわかりませんが、とても几帳面で、シリーズになっている本の順番をきちんと並べ替えたり、トランプを使った後に、数字順に一から四枚ずつマークの順番も決めて並び替え片付けます。

そして、小学校から今まで公文に通い続けひらがなとカタカナの練習をずっと続けています。日本一長く公文に通い続けているのかもしれない。きつと三十年以上の公文歴です。

スヌーピーのぬいぐるみが大好きで、ソファアで四匹くらい飼っています。四匹の家族構成が決まっていて、置く場所を間違えると鋭い指摘がとんできます。姪の私から見ても、とっても可愛らしい面白い叔母さんなのです。家が近いので、私が生まれた時からまゆねえちゃんと関わっています。まゆねえちゃんのことを、ちょっと人と違うな、と思ったのは私が年中くらいだったと思います。父にまゆねえちゃんのことを聞いた時に、笑いながら、そういう人やねん、という一言で特に障がい者であることを説明された記憶はありません。色々なことに対してこだわりが強い分、関わり方が難しいなと思うことも多々ありますが、その「ツツさえつかめば、明るく面白い人です。」

まゆねえちゃんは、一人で電車に乗り、作業所へ仕事に行っています。朝潮橋から地下鉄で弁天町まで行き、JRに乗り換えて芦原橋まで行き、更にそ

こから作業所のバスで通っているのです。昔、通勤途中の電車で迷子になったように、警察にも届け、家族総出で探し回ったこともあったそうですが、だいぶ経ってから作業所へたどり着いたそうで、未だにその経路は謎のままです。おそらく、電車に乗っていた人が、迷っている様子を見て、持っている定期などから乗り換えを教えてくれたりしたのではないかと思います。そうやって周りの人に助けってもらいながら、まゆねえちゃんは社会と関わっているのです。近くの市場に行っても、買い物メモを持っていたら、顔見知りのおばちゃんがその品物を一緒に探してくれる。レジでちゃんとお金も払える。駅まで行く道で、近所の人に会った時、まゆねえちゃん特有の大きな声で「おはよう」と言ったら「おはよう、まゆちゃん気を付けて行きや。」と声をかけてくれる人がいる。あまりに当たり前になっているこの光景が、実はとても優しさにあふれているのだと気付かされます。

私の祖母は、「ふらっと」という就労継続支援B型の仕事場の代表者です。そこには、様々な障がいを持った人がいて、それぞれ違った個性があります。視覚障がい者だけれど、画用紙を数えたら誰よりも正確で早いプロ。知的障がい者で、ガチャガチャの景品を詰めるのが得意なプロ。他にも、色々な特性を持ちながらも、一生懸命仕事をする人たちがいます。時折、言い争いや、間違えて怒られたりしながらも、和気あいあいと仕事をする姿を見ると、障がいがあっても居場所があって、仕事をして役に立っているという実感が持てるいい職場だなと感じます。

障がい者だからと差別したり、特別扱いするのではなくて、人としての個

性だと思えるような人が増えていけばいいなと思います。そのためにもまずは私が、まゆねえちゃんだけではなく、色々な特性のある人と出会ったときも、それを理解し配慮しながらも、「普通」に接するところができる人であらいたいと思います。





五人で行く旅行は、 まだないけれど：

関西創価高等学校二年

坂口 佳恵

私が小学二年生のとき、妹が生まれました。ずっと妹がほしかった私は、家族と一緒に跳ねるように喜びました。学校帰り、お母さんと妹がいる病院へ向かったあの日。いつもと違う帰りを歩く優越感。病院に入るとき、熊鈴の音を手で押さえて胸の奥でワクワクが膨らんでいくあの感覚。妹とお母さんを見ると夏の暑さが吹き飛ばすくらい嬉しかったです。

妹は三歳くらいまで、とても静かで大人しい子でした。あまり喋らないことも、「きっと成長がめつくりなだけ」と思っていました。けれど、三歳児検診の日。お母さんから聞いた医師の言葉は、私たちには重すぎる響きをもっていました。

「自閉症スペクトラム症、ADHD、睡眠障害——」。

さらに、保育園に上がる前の検査では「軽度から中度の知的障害」という診断。意味を全部理解できたわけではありません。それでも、胸の奥が冷たい水で満たされるような感覚と、「普通」という道が私たちから遠ざかっていく音を、確かに感じました。

成長するにつれ、妹の特性ははっきりと表れました。

買い物に行こうとしても、気に入らないことがあると奇声のような声を上げて動かなくなり、スーパーの通路で立ち往生しています。夜は眠れずテレビをつけることもあり、家族全員の眠りが奪われます。言葉が通じないものかしらから、泣き叫ぶこともありました。変化に弱い妹と一緒に、家族そろってのお出かけは難しく、私の十七年間で、五人そろって旅行したことはありません。

ません。夢見てきた外出は、今も棚の奥にしまわれたままです。周りの友だちのように家族との思い出が少ないことが、今でも辛くなることがあります。

何よりも、妹が泣き叫ぶときに浴びせられる周囲の冷たい視線が、私を刺しました。それは私に向けられたものでなくても、「邪魔者を見る」ような眼差しが、大好きな妹に向けられているのが耐えられませんでした。

でも、一番頑張っていて笑顔が素敵なお母さんは、時々悲しそうな、つらそうな眼をしています。

「手が痛いせいで働けなくてごめんね」

「ちゃんとお小遣いあげられてないよね…」

——そんなふうにお母さんは言います。

「もし、ママが亡くなったら、ともちゃんをよろしくね」

と最近によく私と弟に言っています。私はそのたびに、大好きなお母さんと時間が亡くなってしまいうそで、胸がしめつけられます。不安から出る言葉だと分かっているにも聞きたくない言葉です。

寮で生活している私は、必要な時だけお母さんにお金をお願いしています。先日、部活動で遠くに行くから振り込みを頼むと、「LINEで写真が送られてきました。千円札、五千円札、一万円札が扇子のように広がった写真です。それは、リウマチで痛む手を我慢しながら、かけ持ちの仕事で一生懸命に貯めたお金ののだとわかりました。その写真には、「振り込み遅くなってごめんね」というメッセージが添えられていました。

——私は、その「ごめんね」が嫌です。お母さんには事情があるのに、謝

らないでほしい。心まで痛めて私たちのために無理をしないでほしい、そう
思います。

他にも胸の詰まるような思いを抱くことがあります。祖母は、時に少し強
い口調で母の負担が大きすぎるのではないかと口にします。母もまた、諦め
をにじませながら不満をこぼすことがあります。

でも、今は分かります。祖母は、母の負担を心から心配していた。お父さ
んはちよっぴり家事が雑だけど、おいしいご飯も作ってくれるし、私たちの
送り迎えをしてくれます。だけど、妹の細かいところまで気づかなかった。
母は仕事と妹の世話に追われ、自分を追い込み、持病のリウマチを悪化させ
てしまった。それでも、私や弟の学費を気にかけて、無理をして働いています。
だから、欲しいものがあつたときには、母に負担をかけないように自分のお
小遣いで買っています。私は、そんな母の苦しさに気づけなかった自分を情
けなく思います。

妹にも事情があります。祖父母にも、父にも、母にも、私にも事情があります。
誰にでも、その人にしか分からない「事情」があります。きっと、冷たい視
線を向けてしまった人にも事情があります。

泣いている子に冷たい視線を向けてしまったのは、その子や家族の「事情」
を知らなかっただけかもしれません。人は疲れていれば、小さな行動にも苛
立ちを覚えることがあります。だけど、相手にも必ず見えない「事情」があ
ることも、忘れないでほしいです。

障がいはい、誰かのせいではありません。誰か一人が背負い込むべきもので
もありません。それぞれが抱える「事情」を理解してみんなで支え合うこと
が必要です。

妹を通して私は知りました。優しさは、相手を想像すること、思いやるこ
とから始まるのだと。そして、その思いやりは、世界を少しずつ変える力を持っ

ているのだと。

今、九歳になる妹は、明日や明後日、クリスマスがいつ来るのかもわかっ
ていません。それでも、たしかに成長しています。毎日楽しそうに養護学校
から帰ってきているそうです。泣き叫ぶこともなくなりました。私の大好き
な妹の変化は、家族や周囲の人たちの理解と協力があってこそだと、実感し
ています。

——五人で行く旅行は、まだ叶っていません。遠くに行けなくても、大好
きな家族との楽しい思い出はたくさんあります。同じ時間を重ねながら、そ
れぞれの「事情」を抱えながらも、笑顔で支え合っています。その待ち望ん
だ光が射すまで、私は歩み続けます。父と母と弟と妹と幸せな思い出を積み
重ねられるように——





障がい者と健常者が過ごしやすい 社会の答えとは

天王寺学館高等学校二年

杉本 愛恵

私には年が3つ離れた、自閉症の弟がいる。幼いころから可愛がってきた彼は今や中学生になり、身長も靴のサイズも追い抜かされたが、ちょっぴり甘えん坊なところは昔と変わらず、今でも時々ハグなどのスキンシップを求めてくる。癩癩を起こすことはたびたびあるが、兄弟どうしの喧嘩はほとんど経験していない。弟は私のことを正直どう思っているか分からないが、私は弟のことが大好きだ。

自身、障がいを持つ弟がいる環境で育ったため、弟のことを考え出すとどうしても、本人や周りの人の意向を確かめせずに「弟のためにこうした方がいい」と勝手に判断してしまうような、「障がい者が身近にいる人の考え」になってしまっていた。周りの人の意見を聞くと、「こちらの努力を何も知らなくせに」嫌悪感をも抱いてしまっていた。

例えば、弟が小学校入学の時。初めから特別支援学校に入学させるべきだったかもしれないのに、両親が「弟のため」と言って、特別支援学校のある地元の小学校に入学させていた。当時の私はまだ幼く、両親の言うことがすべてだと思っていたため、周りの人が弟について何か言おうと、「周りの人は私たちの苦勞を知らないからさういふことを言ってしまうんだ」という思考回路になってしまっていた。今思い返せば私のこの考え方は両親から影響されたものだったように思う。

自分が年齢を重ね、弟が普通学校特別支援学級から特別支援学校への転校が決まったこと、また、SNSなどで自分とは違う意見に目を通すようになってきたことにより、自分の持ち合わせていない、ほかの人の障がい者に対する価

値観や感覚について考えるようになった。そして、自分を含めた世の中の障がい者に対する感じ方や考え方には、大きく分けて3つ『世間一般の考え』、『当事者の考え』、『障がい者が身近にいる人の考え』があると感じるようになった。先ほどの、弟の小学校入学の例で話すと、「本人の意向も確認せずに物事を決めてしまうのは、親のEゴではないか」「癩癩を起すなどのトラブルが授業中にあっただけ、周りの生徒たちの迷惑にもなる」との、『世間一般の考え』を数年前になって初めて知ったのだが、どれも今までの私にはなかった、もしくはきちんと受け入れようとしなかった考えばかりだった。

また、先日見たSNSの投稿で「障がいを持っているから何をしてもいいわけではないし、すべての行為が仕方ない、と済まされるわけではない。」「障がいのハンデを背負って生きているのは確かだが、そのハンデを背負っているからと言ってなんでもかんでも優しくしてあげるの、それはそれで違う。特定の人に必要以上に優しくしてしまうのも、障がい者の差別になるのではないだろうか。」という発言をしている方がいたことに対し、こういった新しい視点に色々と気づかされ、これまでの自分の言動を見直すきっかけになった。『障がい者が身近にいる人の考え』のようなものとして、今まで自分の中にあっただけ、「周りの人は私たちの苦勞を知らないからさういふことを言ってしまうんだ」という考えも、未だに私の頭の片隅に残り続けているが、世間一般の方々からすれば「当事者のことを思って必死になっているようだけど、それは本当に『当事者の考え』に寄り添った言動なのか。空回りしていたり余計なお世話な可能性だってある。」と思っているのかもしれない。

今までの経験や、近年の考え方の変化を通して、同じ世界を生きている人でも、それぞれ意見の内容や視点、立場に大きな違いがあるため、各々の考えの本質をきちんと理解することで、障がい者と健常者がともに、より一層過ごしやすい環境を構築していくための自分の意見を、初めて言うことができるのではないかと考えるようになった。今までのように、相手の言い分を何も理解しないままに頭ごなしに否定するのでは、単に自分のエゴを吐き出していることになりかねないと思う。

実際問題、この課題は白黒はっきりできない、グレーで、またシビアなものなので、答えを導き出すには熟考する必要があるように感じる。

私には弟がいる分、障がい者と健常者の過ごしやすい社会について幾度も考えを巡らせてきたが、未だに自分の明確な答えは出ていない。なかなか簡単にはいかないし言語化することも難しいが、時間を掛けて多くの意見に触れ、様々な人の立場について考えることで、いずれは自分の中の答えを見つげられるようになりたい。





みんな仲良し

田辺 とも子

今から33年前、脳性麻痺と視力障がいを持つ娘当時11才、母私44才の時も作文をださせて頂きました。娘は私が作文を書いた時の44才になりました。近所の小さい子ども達のふれあいの中から、これから先、51億人の世界の人人々にできるだけ多くふれあえることを喜びに生きていきたいと最後を結びました。その後どんな生き方ができたのかな。

盲学校を娘は18才で卒業し社会人になりましたが、なかなか行く所がありませんでした。障がい者の仲間のお母さんが、今行っている作業所(夢飛行)を紹介してくれました。そして面接に行き、どんな子受け入れますよ、自立とは私達のことを受け入れてくれることなんですと話して下さいました。私は自立とはなんでも一人でできることだと思っていました。この考えは間違っていることに気がつきました。できないことをまわりの者が補って下さたら自立なんだと思えるようになりました。合格できて通所できることあの喜びは今でも忘れることはありません。

夢飛行では、絵画(皆でビー玉をころがして作品を作ったり)、作った作品を交代で歯医者さんに届けに行っています。スタッフの方とペアを組んで先生に車いすダンスを習い、一年に一度発表会もあります。また旅行にも行き、パスポートを取って初めて飛行機に乗り韓国に行ってきました。今年は何博にも行きフランス館に入りました。行く時娘が「暑いなあ」と言ったら、通りすがりの方が「暑いねえ」と、また歌を歌っていると「うまいね」と声をかけてくれたようです。小さなふれあいがとても嬉しいことなんです。いろんな取り組みをして地域へのふれあいをしていますが、その中で、ワーキン

グホリデーの受け入れをしていて、いろんな国からスタッフの方が来ます。その方々の言葉を聞き、いつの頃からか娘は、意味はわかりませんが英語の発音で話するのが得意になりました。以前日本語が話せない方が来て、娘が英語で話しかけると聞き、行く機会があったので行ってみると言葉が通じているかのように英語でスタッフの方と話していました。とても楽しかったです。最近もフランスの方の声を聞いただけで英語に切り替えるバイリンガルな展子さんですと連絡がありました。また我が家でも娘の姉がアメリカの方と国際結婚をしたので、毎年夏になると子どもを地域の学校に入れるため2ヶ月ほど帰ってきます。皆が帰ってきた時、とくに義兄の声を聞くと娘は、「アィムソーリー、ハロー、OK」とか知っている単語をならべて、英語調で話しかけて迎え入れています。それに上手にこたえてくれるので嬉しそうにしゃべります。外国の方が日本語で話しかけても、娘の耳には違うように聞こえるのか英語の発音になります。夏の2ヶ月は我が家は英語がとびかう生活をしています。娘も仲間に入って英語調でしゃべり、時にはあっていることもあり、おもわず皆笑ってしまいます。それでもお母さんは娘のように英語調で話が出来ません。私には通訳が必要です。どこの国の方にも物怖じせずにコミュニケーションをとるのが大好きな娘に、どなたも心のこもった対応を下さる感謝ですね。人の出会いによって大きくなつながらの輪ができ、娘の心も豊かに成長させてくれています。

最後に娘が大好きなのですが、その中のひとつハッピーバースデーも好きで、夢飛行で誕生日があると歌いながら帰ってきます。いつも姉の家族、

おじさん、おばさん、お友達にハッピーバースデーの歌を歌ってプレゼント
してきます。歌のあと「おめでとう」と言います。皆さんとても喜んで、す
いすいなあや言いついてくれます。
これからもうっぱい歌って、おしゃべりして皆さんと喜んだり、楽しんで
らでまいるついに頑張ります。





受賞式とその後で

森田 香奈

昨年、急に思い立ち経験もないのにこの体験作文に応募したところ、自治体の方から入賞したとお知らせを受けた。

大変光栄で嬉しかったが表彰式への参加にはかなりためらいがあった。出席を決めるまで色んな考えが頭をよぎった。

どうしても他人には隠しがちな精神病。人前に晒すことの後先やオープンにする勇氣、発症年齢が若く物事を自分で判断する経験が極端に少なく自分で信じる経験に欠けていたことに気が付いて思い切って出席することを自分で決断した。

行ってみて驚いた。周囲の人たちが温かいのだ。それも想像もしなかったくらいに。何か特別な出来事があったわけではない。でも滲み出るお人柄、安心感（神経が過敏でそういうものに影響を受けやすくなっている）。それから醸し出される雰囲気の中で式を終えることができた。出席者間での会話もあり見ていて羨ましかった。

人に怯え表面だけを取り繕い猜疑心の中で生きてきた私には考えられなかった事だ。その時に発想の転換が頭の中で起こった。

「心の輪」とは英文字のOではなく実はCなのではないだろうか。これまで輪の内径を大きくするものだと思いついてはいたが（それも方法の一つだと思つ）まずは閉ざされた輪の入口を開いて伸ばして一本の棒のように線にすることが必要だと感じた。そして同じような人達とつながって新たに作り直す。

そこには差別も偏見もなく、新たな大きな内径のOがあり自分にも役割が

ある。

助ける、助けられるの二択ではなくて支えあい、良い意味での利用し合える関係。それがあれば共生も無理なく持続できる気がした。

当然それには相互に協力が不可欠で、助力を得るためには、まず自分の弱みや強みの棚卸が必要でそれが今の自分にできる事だと痛感した。

自身の経験として、本当にどん底を意識することで這い上がる氣力に縋り付くしかない。体を感じる重い重力というか水の中にいるような抵抗力とそれらにまわりつかれながら抗い続ける日々は今後も続いていくがこの体験は強みにならないだろうか。

出席に際し根深い偏見は誰よりも他でもない自分が作ったものだと思いつたときに大きな障壁は乗り越えた感じもあり風穴を開けるきっかけでもあったと思う。穿った一点をあとには押し広げるだけだ。

その一点はとても重くて長い歳月だった。焦りや苛立ちなどで病気の受容はなかなか簡単ではなかった。

式にいた他の人達からはどんな私が見えていたのかはわからないが知らないということが偏見の原因につながることはあると思つ。

私が思ってきたほど「世間の（普通の？）人達」は怖くなかった。お互いに恐れるのではなく、まずは信じることから始められないものだろうか。まずは慣れることから。

自身が病気であると気が付けない統合失調症はそれが悪さをするのが晩年には落ち着くこともあると言われている。私はもうその年齢に差し掛かり始

め、またそうではなくてもたとえ若年でエネルギーがありあまっていたとしても、何がしかの気付きが問題行動の抑止力とはならないものか。

思うように動けないもどかしさだけにとどまらず迷惑で恐ろしい存在だと無条件に疑われるのはつらいものがある。

自分や他者への信頼を損ねずにすむ方法はないか。これからは果たしてその一助となれないものだろうか。

疲労感を酷くしたようななさや頭の働きを抑制する見えない力。それでももがき続けるしかない現実。

病気でできなくなっていることも少なくはないが、無自覚のままで皮膚のようにはばりついている偏見が見えない枷となり、本来の自分の能力や性能を妨げてきた部分も少なからずあると思う。

このような発信の機会をいただき、まだまだ閉ざされた世界から一步を踏み出したばかりだが、どのような形であったとしても表現することで見えてくるもの、景色や進む未来が輝かしく素晴らしいものであればと希望を込めて末筆としたい。願いも込めて。





理想に向かって

宮川 清美

私が初めて障がいを持つ人を見たのは、小学校の特殊学級に通っている数名で、交流を持つ事は一度もありませんでした。だから障がいを持つ人の事はまるきりわかりませんでした。

中学校に上がった時（私が通っていた中学校は三つの小学校が合併したマノモス中学校でした。）となりの小学校から来た右半身が不自由な子と知り合いました。きっかけは小学校から一緒だった数名に露骨に罵倒されたり、いじめを受けているのを見たことです。そんな感じで、何故その子がいじめられていたのかわからないまま、私から声をかけました。

私に通っていた中学校の制服はセーラー服で、彼女は、セーラー服のリボンもスニーカーのひもも自分では結び事ができません。私と一緒にいる時は、私が不器用ながらも結んであげていました。二年になって、すっかり仲良くなったからか、彼女の甘えがでてきました。

リボンもスニーカーも綺麗に結べないと何回もやり直しをさせるのです。私も「大丈夫だよ、結べてるよ。」と言っても気分を害した態度をとってきます。私も障害を持つ人の気持ちが変わらなかったのです。どんどん疲れ、離れていきました。それから高校生、社会人になり私は、誰一人として障がいを持つ人とかかわらない日々を淡々と過ごしていきました。

そして、三十歳半ば、色んな事が気になって、完璧じゃないといけない、仕事ができないといけないという思いで首がしまる思いをするようになってきたのです。あきらかにメンタル不調。初めてメンタルクリニックのドアをたたきました。診断名は、「強迫性障がい、うつ、複雑性PTSD」でした。

それでも私は苦しくて会社へ行かなければいけない。四十歳まで普通に働き続けました。そしてアメリカ滞在の機会に恵まれ、アメリカにいた三カ月間は、本当に色々な症状が起らず開放され充実した日々を過ごしました。

しかし、日本に戻ると、また苦しい毎日に逆戻り。ドクターから精神障がい者手帳を交付してもらうようにアドバイスを受けました。

私自身、障がい者に偏見はありませんので他の人もそんなものだろうと思いついでいました。ところがふとした時に私の障がい人が知られるようになる、一人また一人と友達が去っていきました。その時、言葉にならない悲しみと怒りが湧いてきました。そして「そうなんだ健常者は障がい者を受け入れないんだ。」としみじみ思いました。

しばらくして日本人のいない英会話学校に通い、何故かわかりませんが、何の知識もないままキリスト教に興味を持ち始めました。

少人数レッスンや個人レッスンの時に講師にクリスチャンかどうかたずね、クリスチャンだという講師にキリスト教の教えを聞いていきました。そしてその中の一人が堺の教会に通っている事を知り、私も連れて行ってもらいました。プロテスタントのその教会はとてもシンプルで、賛美歌を歌ったり、聖書の解説を牧師様がしてくれました。それだけなのにとっても居心地がよへ、私は毎週通うようになりました。数年がたち、教会は大きくなり、中百舌鳥に新築の教会が建ちました。私が住む場所から車で四十分かかるので、教会の近くに引っ越すことにしました。そこでは毎日近くに居場所があり、いつも皆が受け入れてくれました。健常者の方も普通に接してくれ、次第に気持ち

ちが軽くなり、楽しく通っています。

また以前に住んでいた市とかなり違い、福祉施設が充実していて、まずはデイケアに通うことにしました。そこでは看護師さんや、作業療法士さん、精神保健福祉士さん、臨床心理士さん達がそろっていて充実したケアを受ける事ができました。また地域包括支援で、趣味を楽しむこともできました。そして、作業所という場所がある事を知り、家の近くの作業所に通う事に決めました。わずかですが工賃をいただき、できる範囲でいろんな仕事をさせて頂きました。

また、作業所で「ピアカウンセリング（障がい者による障がい者へのカウンセリングやサポート）」の講習会がある事を知り、自分の為にも、他に困っている人の為にも知識を得たいと思い、作業所に通いながら講習をうけました。講師は実際にピアカウンセリングを続けている方々で生の声を聞け、色々と感じることができました。

さらに、ヘルパーさんや訪問看護師さんに来ていただくようになり、かなり生活が助けられています。

健常者の友達はまだできてはいませんが、作業所、ヘルパーさん、訪問看護師さんと交わっていくうちに、私の中の健常者に対して持っていた「きつ」と理解してくれないだろう」という思いや、卑屈な思いが小さくなっていききました。しかし、まだ福祉事業所の方々や教会の方々になっただけで、これからは機会があればできるだけ積極的に交流を持ちたいと思います。

私の望みは障がい者と健常者の垣根を越えて、お互いがそれぞれの特性を認め一人の人として接し合う事ができる社会になることです。



障がい者週間の

ポスター

目次

《最優秀賞》

◆小学生部門

〔大阪府〕

誰かを喜ばせたらさき始める花

松原市立天美北小学校 五年

大賀 珀空
……
30

《優秀賞》

◆小学生部門

〔大阪府〕

みんなの気持ちいいきもち

松原市立天美北小学校 五年

日笠 栄都
……
31

〔大阪府〕

一緒に歩こう

茨木市立穂積小学校 四年

道下 咲
……
31

〔堺市〕

てっだつてください

賢明学院小学校 六年

森 葵生
……
32

〔堺市〕

いっしょにいこう！どこまでも！

北八下小学校 一年

眞鍋 夢結
……
32

◆中学生部門

〔堺市〕

みんなの社会

羽衣学園中学校 二年

中崎 由唯
……
33

〔堺市〕

ノーマライゼーション

羽衣学園中学校 二年

木村 羽来
……
33



大阪府
松原市立天美北小学校5年

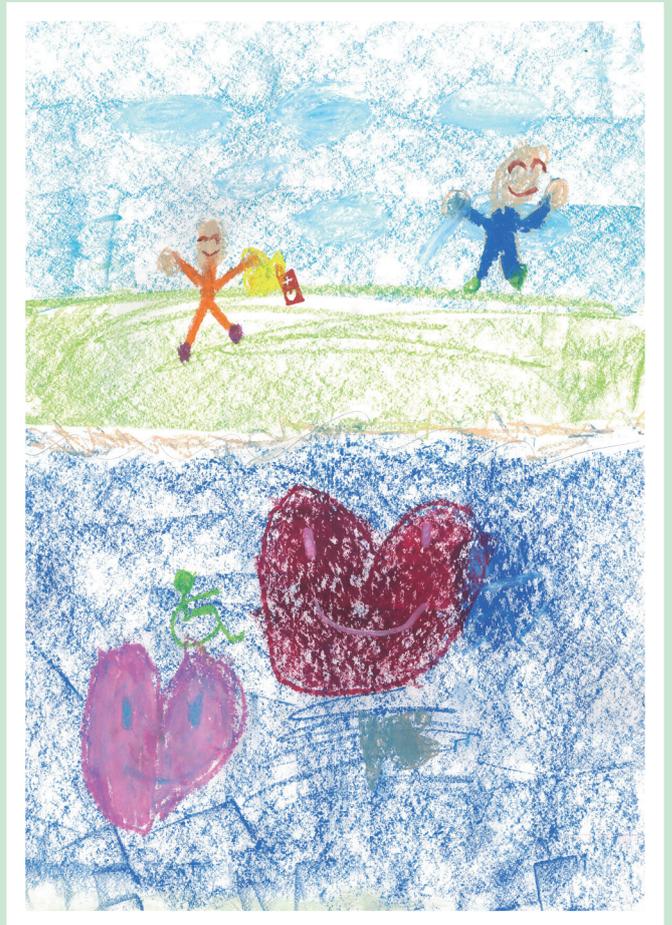
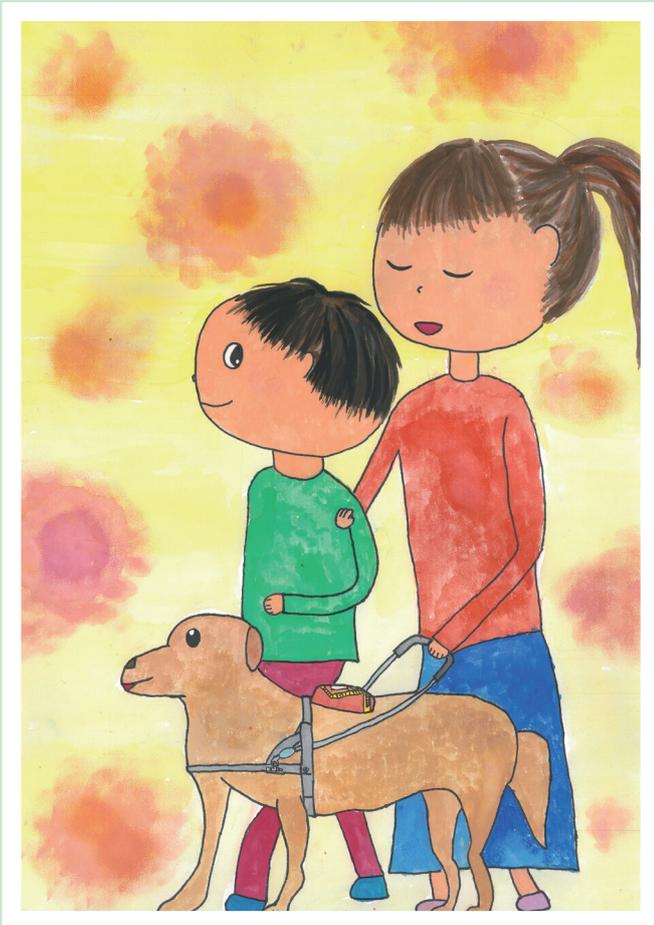
大賀 珀空

『誰かを喜ばせたら
さき始める花』

令和
7年度

障がい者週間のポスター





大阪府

茨木市立穂積小学校4年

道下 咲

『一緒に歩こう』

大阪府

松原市立天美北小学校5年

日笠 栄都

『みんなの
気持ちいいきもち』



堺市

北八下小学校1年

眞鍋 夢結

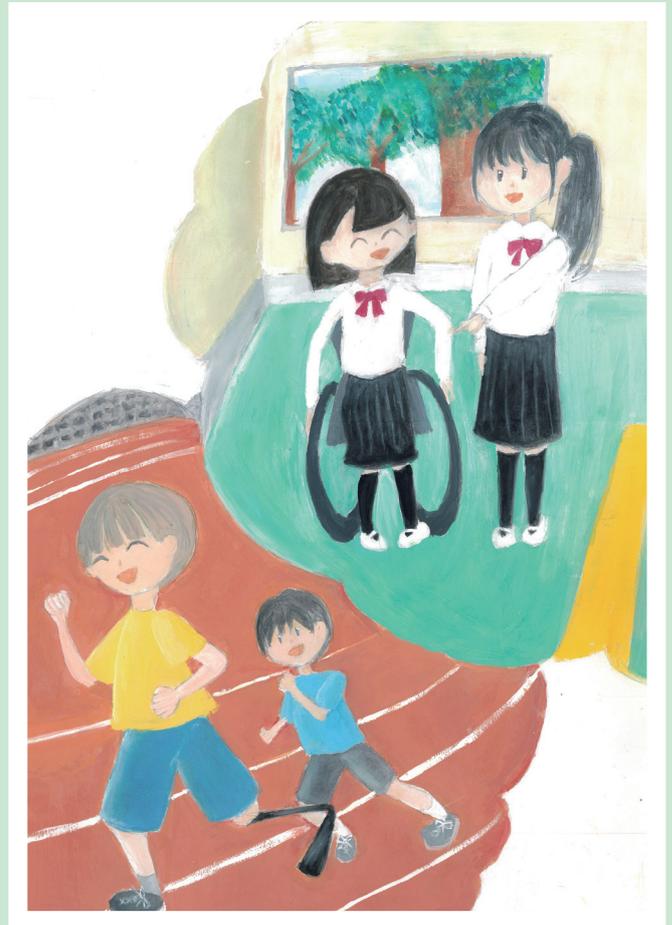
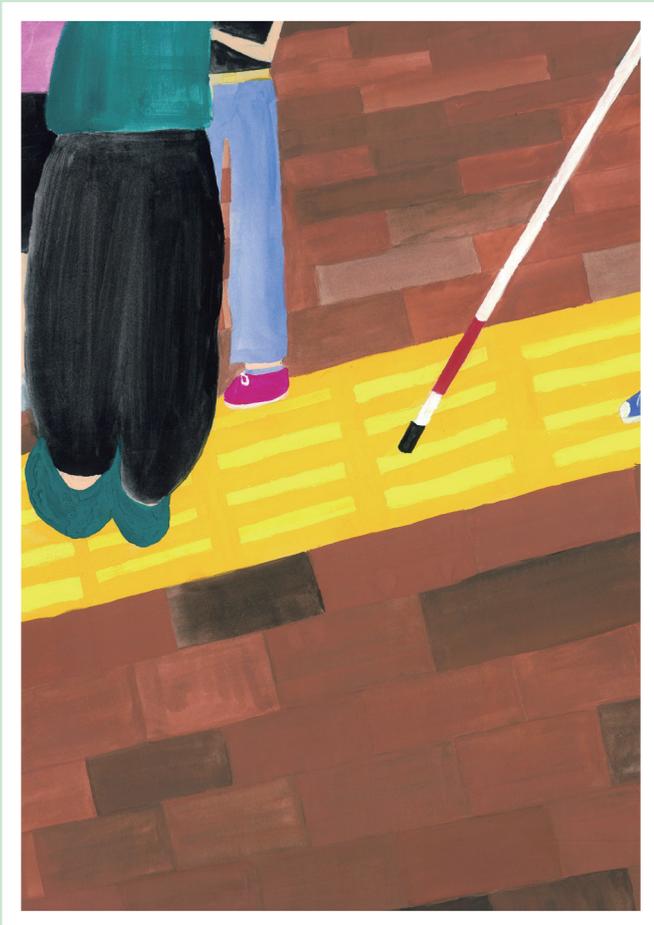
『いっしょにいこう！
どこまでも！』

堺市

賢明学院小学校6年

森 葵生

『てつだってください』



堺市

羽衣学園中学校2年

木村 羽来

『ノーマライ
ゼーション』

堺市

羽衣学園中学校2年

中崎 由唯

『みんなの社会』

障がい者週間

(障害者基本法)

12月3日→9日

【障がい者週間とは】

「障がい者週間」とは、障がいの有無にかかわらず、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向け、国民の間に地域社会での共生や差別の禁止などに関する理解を深めるとともに、障がい者が社会、経済、文化その他あらゆる分野の活動への参加を促進することを目的として、障害者基本法に定められています。

積水ハウスグループは、障がい者の自立と社会参加を応援しています。



SEKISUI HOUSE